

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2012
 課題番号：20520326
 研究課題名（和文） 国家変容と言語問題のモデル的研究：ハンガリー語のケース
 研究課題名（英文） A Model Study on State Transition and Language Policy:
 the Case of Hungarian
 研究代表者
 岡本 真理（OKAMOTO MARI）
 大阪大学・言語文化研究科・准教授
 研究者番号：10283839

研究成果の概要（和文）：本研究は、国家変容という時間軸における言語意識・言語問題・言語政策の諸相を、ハンガリーをモデルに検証した。支配と被支配、植民地的拡張と国土分断といった複雑な国家変容を経験したハンガリーは、国家と民族が対峙しうる多くの問題を内包している。それら諸問題を、国家における言語政策といったマクロ的視点からのアプローチと、文学・文化活動を通じた国民意識の醸成といったミクロ的視点の双方から分析し、国家・民族と言語問題の一般性を検証した。

研究成果の概要（英文）：The present study deals with problems of state and national languages in the course of the transition of nation. The main subject is Hungary in the modern period --from the late 18th century to the present--, which is characterized by such national problems as ruling-ruled relation, national expansion, diaspora and minority problems. These problems are analyzed by both macro views as nation and language policy and micro views as growing of national consciousness in literary works and literary movements.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：その他の各国文学・ハンガリー語

1. 研究開始当初の背景

ハンガリーを含めた中東欧諸国の言語民族問題においては、特に 1989 年の体制転換後の数十年に目覚ましい研究成果を出してきた。社会言語学的には多言語言語使用の実態解明、歴史学では近代国民創造のツールとしての言語問題や多民族国家における多言語多文化共存の知恵を再検証しようとする試みであり、それは現代の言語政策研究に深い示唆を与えるものである。

本研究はそのような学術的背景を近現代を貫く通時的現象として整理し、「国家の変容と言語問題のありかた」をテーマに研究方法を組み直したものと見てよい。ハンガリーをモデルケースとしながら、国家形態の複雑な変容とそれに影響される言語問題の諸相をより一般的枠組みで明らかにできるものと考えた。

2. 研究の目的

(1)近代から現代にかけてのハンガリーの「国家変容」を①国民概念の萌芽期、②国民国家形成期、③植民地的拡張期、④ディアスポラ期の4段階と捉え、それぞれの時代に民族言語問題がどのような具体的問題を抱えその解決を探ったかを解明することが目的である。以下に時代区分とその特徴的な問題を略述する。

①国民概念の萌芽期

いわゆる「啓蒙期」とよばれる 18 世紀末から 19 世紀初頭で、文化的ナショナリズムの興隆、近代ハンガリー文学の開花期。民族語復興運動の中心として言語改革運動が展開する。

②国民国家形成期

1830 年代から 1848 年革命に至る、いわゆる

「改革期(reformkor)」(ドイツでいう「3 月前期」に相当)で、政治的ナショナリズムの強化とともに、民族語による演劇や出版活動の本格化が見られる。

③植民地的拡張期

19 世紀後半のハプスブルク帝国がアウスグライヒによりオーストリア=ハンガリー二重君主国となった時期で、ハンガリー王国が一定の自治を獲得したと同時に、国内の少数民族に対して「ハンガリー化」を求める政策が強化される時期。

④ディアスポラ期

第 1 次世界大戦につづく帝国の崩壊、および後継の新興国民国家の誕生。ハンガリーにおいては「国土分断」による逆転現象、すなわちハンガリー人のマイノリティー化が発生する時代。バイリンガリズム、母語の維持、国家間関係と言語政策・言語法が主たるテーマとなる。

(2)以上のように、被支配民族であると同時に支配民族であった近代、そして国土の分断と民族離散による少数民族問題に直面する現代といったように、近現代におけるハンガリーの複雑な国家変容は、国家と民族が対峙しうるさまざまな性質の問題を内包し、普遍的・モデル的研究となりうる条件を満たしていると考えられる。近現代ハンガリーにおける言語問題のあり方を検証し一般化することで、国家のあり方と民族言語をめぐる諸問題の解明やその解決に寄与することを目的に設定した。

3. 研究の方法

研究の方法としては、国家における言語政

策といったマクロ的視点からのアプローチと、文学・文化活動を通じた国民意識の醸成といったミクロ的視点の双方から問題を扱った。

(1)マクロ的（国家政策的）な観点からは、①近代前期のハプスブルク多民族国家の言語・教育政策の移り変わり、②近代後期の二重君主国時代におけるハンガリー王国内のハンガリー化政策、③トリアノン以降現代に至るまで未解決のスロヴァキア・ハンガリー問題を言語法をめぐる問題意識から分析する、といったことが主なテーマとなった。

① ハプスブルク期の言語政策

近代初期までは聖書の翻訳や啓蒙的教養書という媒体を通して、知識人たちが民衆の母語に関心を示し、それが宗教・教育・文化活動において社会階層の違いを超えて浸透していった。その「民衆の母語」には民衆によりよく理解されるための便宜という意味合い以上のものはなかったが、18世紀末からナショナリズムが活発化すると、徐々に「民衆の母語」は「民族の言語」となり、その近代化・標準化・使用域の拡大を通して、民族は顕在化し確立されていく。それは、民族的自治の拡大、ひいては国民国家化をめざす政治運動の高まりと並行する。そして、知識人たちは、かつてのような多言語的文化的の担い手ではなく、各々が1言語を背負う「民族の代表者」の役割を持つようになるとともに、しだいに民族語間の排他的な衝突が生まれるようになった。

② 二重君主国時代の言語政策

1848年革命の失敗とバツハ体制期の抑圧的な政治状況のなかで、民族語運動は一時期

大きく後退するが、それは独立国家を標榜したハンガリー人だけでなく、オーストリア・スラヴ主義を選んだスラヴ人たちも同様の状況にあった。1867年のアウスグライヒにより、ハンガリー人は一定の地域的自治を保障されたが、他の諸民族にはその権利が与えられず、スラヴ人が描いた連邦構想はむしろハンガリー・ナショナリズムの犠牲となった。この結果、とくに厳しい状況に置かれたのはハンガリー王国内の諸民族だった。19世紀末にいたる強力なハンガリー化政策は、二重君主国下でのハンガリーの威信の誇示、王国の国制の堅持という「上からの力」であると同時に、経済発展とともにハンガリー化する市民社会におけるハンガリー語の優位性は「横へ広がる力」として地方にも波及した。

③ トリアノン以降の言語問題

スロバキアの新言語法（2009年9月施行）に焦点を当て、その内容と国内少数民族の言語権への影響、またそれをめぐる国際社会の関与について検証すると同時に、本言語法をEU諸国の他の言語法と比較検討することで、本言語法のもつ性格を明らかにした。その結果、近代以降の国家形成の歴史的経緯が、言語法の性格に少なからぬ影響を与えるということがわかった。すなわち、被支配民族の歴史を克服して新興国家を形成した民族は、自らの「国語」の保護・育成に重きを置くあまり、国内の少数言語の使用権が十分に保障されない事態がおこりやすいということである。そのような状況は、かつての支配民族が国内で少数民族としての逆転した位置に置かれている場合、またその少数民族が多数派を形成する国家が隣接する場合に顕著にあらわれる。「国語」の擁護・育成と少数言

語の権利保障の両者を同等に重視しつつ、そのバランスに対して細心の注意を払うこと、それに対して国際組織が十分に監視機能を果たすことが求められる。以上のように、ハンガリー人マイノリティのケースをモデルとして、国家の変容と民族問題の普遍性の一片を解明することができた。

(2)ミクロ的観点からは、文学作品や民族文化運動の興隆を通して、近代市民階級の国民意識の醸成を分析した。特に、①近代前期における文学ジャンルとテーマの変遷、その近代都市の成長との関係、②文学の中のハンガリー人像という表象の変化、③文学の歴史性と民衆性、といったテーマを設定し、具体的な作品や定期刊行誌および文学運動の展開を検証した。

近代ハンガリー文学では、主な関心は「歴史」と「民衆」に集約される。国民の歴史を創造することは、近代民族の存在要件ともいえるものであったが、文学の中でもそれは「国民的叙事詩」の創作となって改革期ハンガリーで盛んに顕れた。叙事詩のテーマは民族の想像的起源である神話やハンガリー民族のカルパチア盆地定住、また中世の王侯貴族の悲劇的事件などが好んで扱われた。その作品群は過去を舞台として文体は古典的であり、悲劇性が高尙とされた。歴史叙事詩は民族的威信を裏付けるもので、国民を啓蒙する使命を負った。

一方、「民衆」への関心は啓蒙主義とともに外国（主にドイツ・フランス）からの影響として始まる。民謡の収集や民衆言語への関心は、近代市民階級の成長によって定期刊行誌や劇場、文化団体の活動が主たる媒体となって高まった。改革期の文学では、歴史的(悲

劇)叙事詩は徐々に影をひそめ、純朴で快活な「空想的民衆」が次々と生み出された。踊りや音楽など大衆的娯楽要素がふんだんに使われるようになったのもこの時期だった。以上のように近代文学における民族的理想像は、悲劇の王侯貴族から素朴な民衆(=農民)へと姿を変えていった。それは、民族意識の萌芽期から国民国家形成期に向けて、市民階級の急激な成長(経済的成長・教育と娯楽の普及)と密接に結びついていたことがわかった。

4. 研究成果

本研究は近現代の国家変容という時間軸を前提に、その中で言語意識・言語問題・言語政策の諸相を、国家政策的マクロ視点と個々の文学作品や文学運動といったミクロ視点の双方から解明し、その全貌を明らかにしようとするものだった。扱った問題は多岐にわたり、そのテーマやレベルもさまざまで、学問的領域も文学と言語学の両方にわたった。短期間で全体的統一感のある成果を出すことは難しく、どちらかといえば個別問題の検証と論考の積み重ねの様子を呈したことは否めない。しかし、これは問題設定と研究方法の性質上やむをえないといえよう。

今後は、ハンガリーの近現代における民族言語問題に関して、さらなる個別的テーマの研究を重ね、言語運動と文学運動の諸相を国家変容の文脈の中で分析し、長期的にはその全貌を提示すると同時に、多様な国家と民族言語問題の普遍的なあり方の解明に結び付けたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 岡本真理 「Az idegen nyelvek oktatásának sajátosságai Japánban, különös tekintettel a vizuális és auditív képességekre」 Gondolatok a hungarológiáról (2012). 241-252 頁。国際ハンガリー学会、査読有。
- ② 岡本真理 「国語の推進か、少数言語の保護か?—スロヴァキア新言語法(2009)のケース—」『大阪大学世界言語研究センター論集』第 4 号(2010)、119-132 頁、査読有。
- ③ 岡本真理 「生粋のハンガリー人像を追求して—ペテーフィ『勇者ヤーノシュ』とアラニュー『トルディ』を比較する」『大阪大学世界言語研究センター論集』第 1 号(2009)、141-154 頁、査読有。

[学会発表] (計 4 件)

- ① 岡本真理 「近代ハンガリーの民族語運動と劇場——1830~40 年代の国民劇場」日本ウラル学会 2012. 06. 30、関西外国語大学。
- ② 岡本真理 「Az idegen nyelvek oktatásának sajátosságai japánban, különös tekintettel a vizuális és auditív képességekre」国際ハンガリー学会 2011. 08. 23、バベシュ・ボヤイ大学 (ルーマニア)。
- ③ 岡本真理 「スロバキア新言語法(2009)とそのハンガリーへの影響」日本ウラル学会 2010. 07. 03、麗澤大学。
- ④ 岡本真理 「スロバキアとハンガリー——近くて遠い関係」2009. 10. 24、関西チェコ・スロバキア協会。

[図書] (計 5 件)

- ① 岡本真理、大阪大学出版会、「王たちから農民へ——ハンガリー国民文学運動のなかのヒーローたち」野村泰幸他『ヨーロッパ・ことばと文化——新たな視座から考える』(2013) (予定)。
- ② 岡本真理、昭和堂、「近代の民族語運動」大津留厚他『ハプスブルク史研究入門』(2013)、158-163 頁。

- ③ 岡本真理、大阪大学出版会、『ハンガリー語』(2013)、総ページ数 268 頁。

- ④ 岡本真理、白水社、早稲田みか他『ニューエクスプレス ハンガリー語単語集』(2012)、総ページ数 236 頁。

- ⑤ 岡本真理、国際語学社、『まずはこれだけハンガリー語』(2010)、総ページ数 110 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 真理 (OKATOMO MARI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：10283839